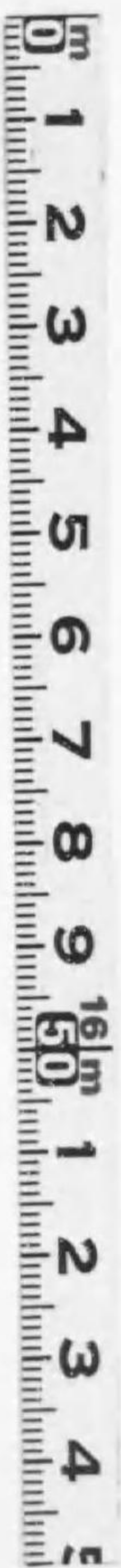


特116

858

御門流秘首古子集



始



特116

858



之流
嘉
坐

大正
3. 9. 21
内交



明治二十八年九月

從四位水府門忠起



抑當御門流花道の儀、人皇三十
二代の聖主 用明天皇の御子
聖徳太子の御造法にして遊樂の意
にあらず貝因由、竹花を待てあかしか
くそき道十年久しく南都一楽院を
橘御殿にお侍ありて昔く世に用

ハ世しめらばされの者人少可しに先
少林森坊元治の始め甲子辰の以橘
御勅を言れ御令旨を賜り花道弘傳
匠を以てしとあ上さに畏る度くをに
川にありこといありぬ年を以月を以て
るまゝに御門の流末ひろく榮へるに傳に

先河の功興つて力ありさる所に一乘
宮門跡高時御門主大徳正徳昭敏明
治維新の際 勅許はより徳節し
此より水取川忠起と改称せしを今に
男笛尉とも授り花を以て本水取所故
の如くおししけるまゝなるを以て其の度

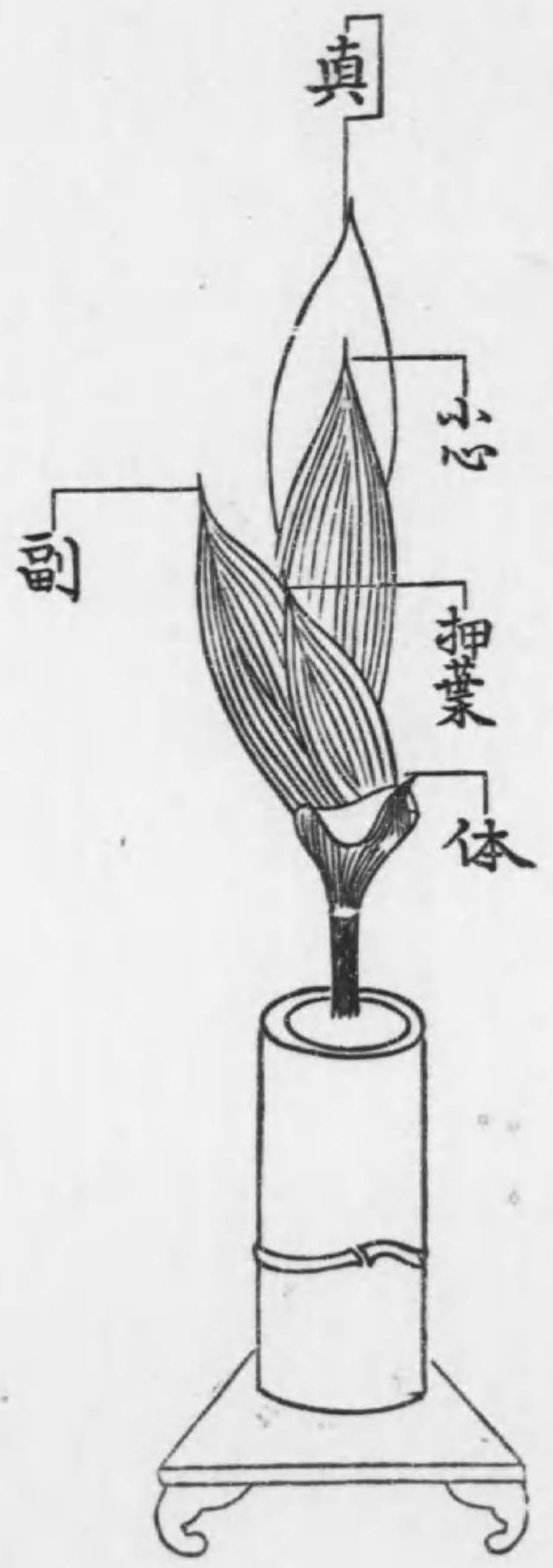
高ふさる人のあまきよのあはされの事の概
 要を書きしはしりもて緒を以て代ふ
 明治二十八年乙未の九月

長洲園小月

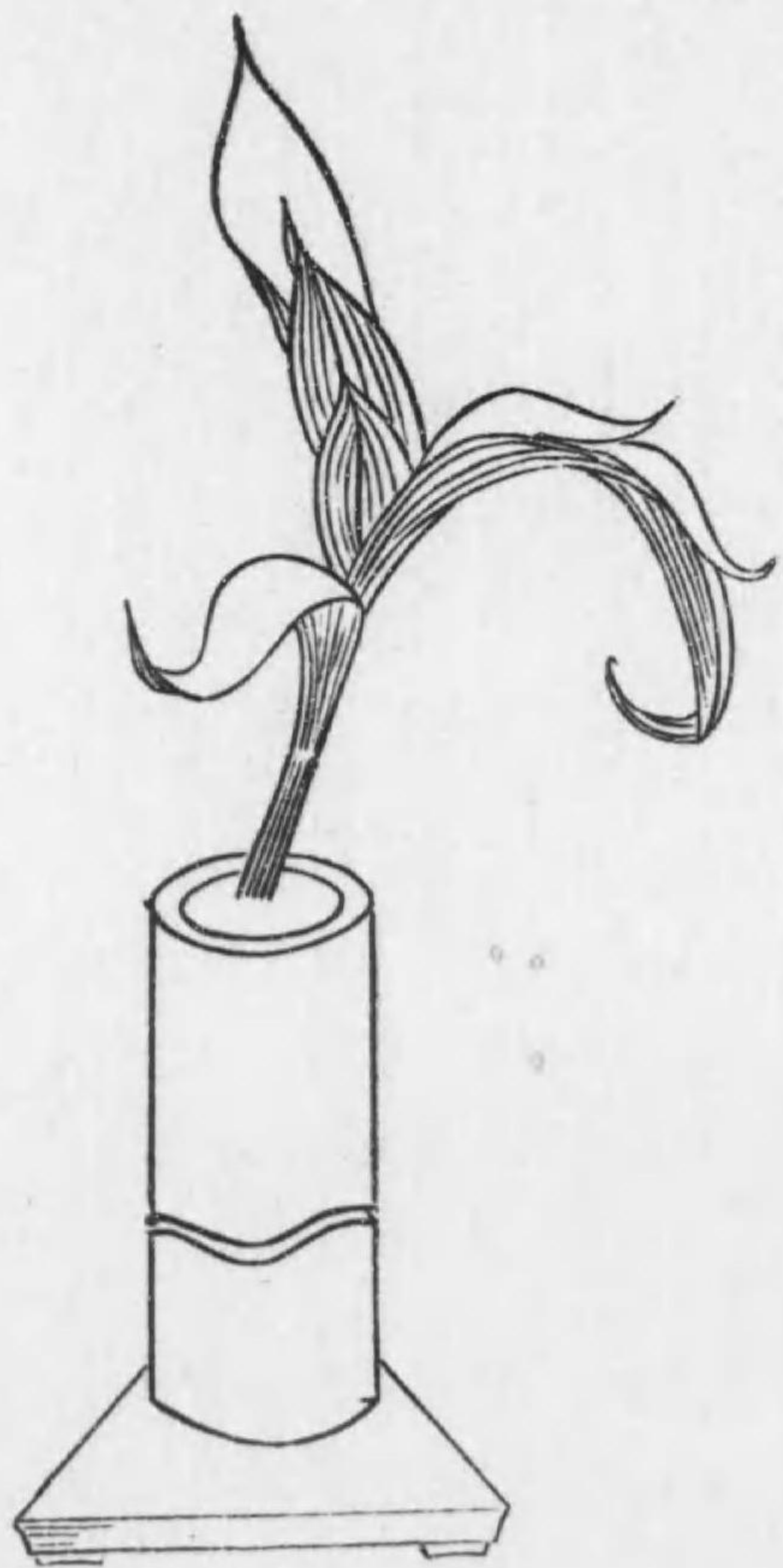
大受初為母負之

敬白

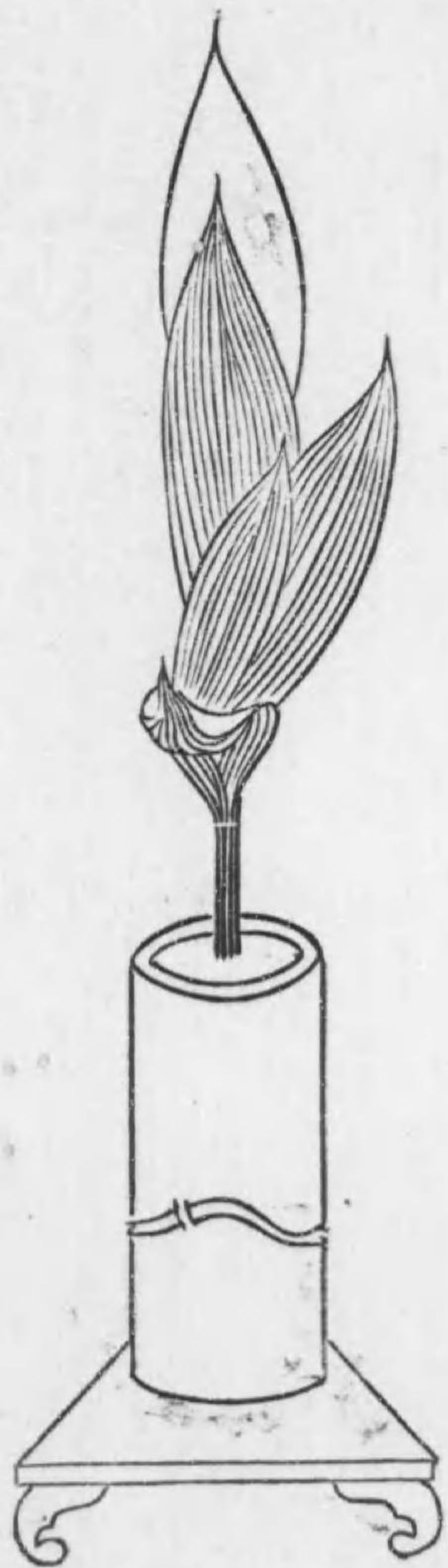
真之右五葉馬蘭



馬蘭七葉
草生之花



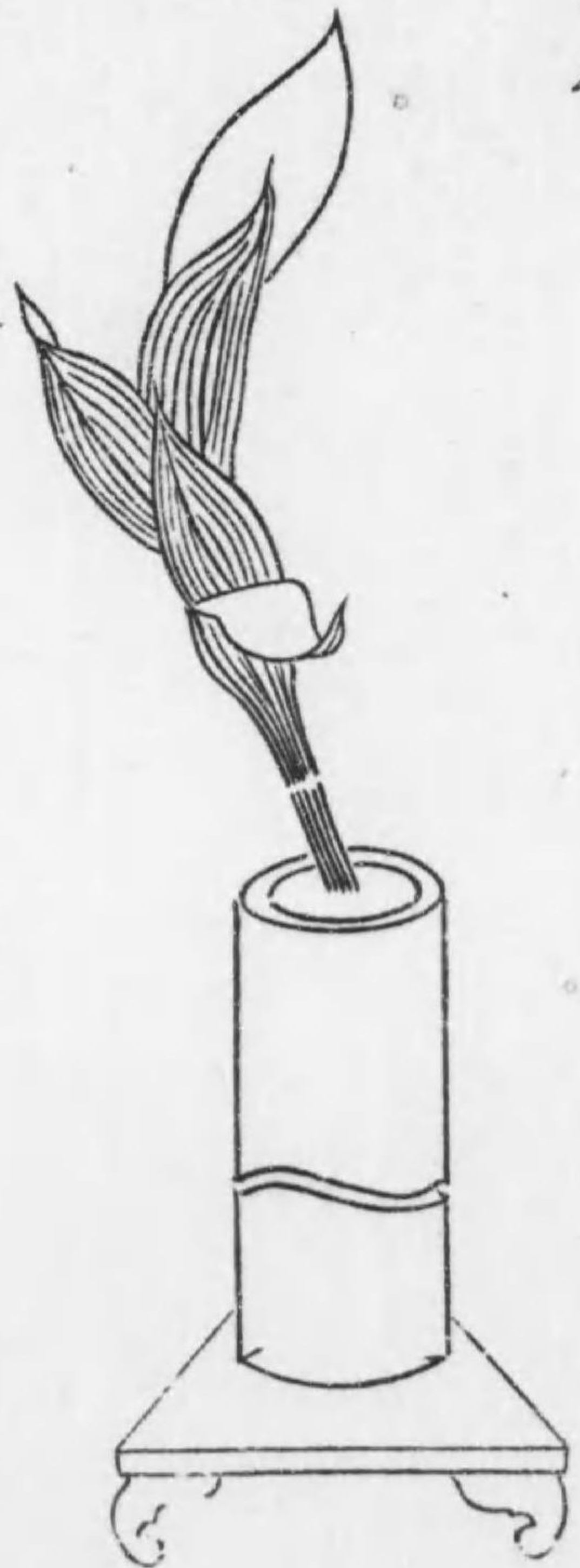
真之充



行史右



行史右



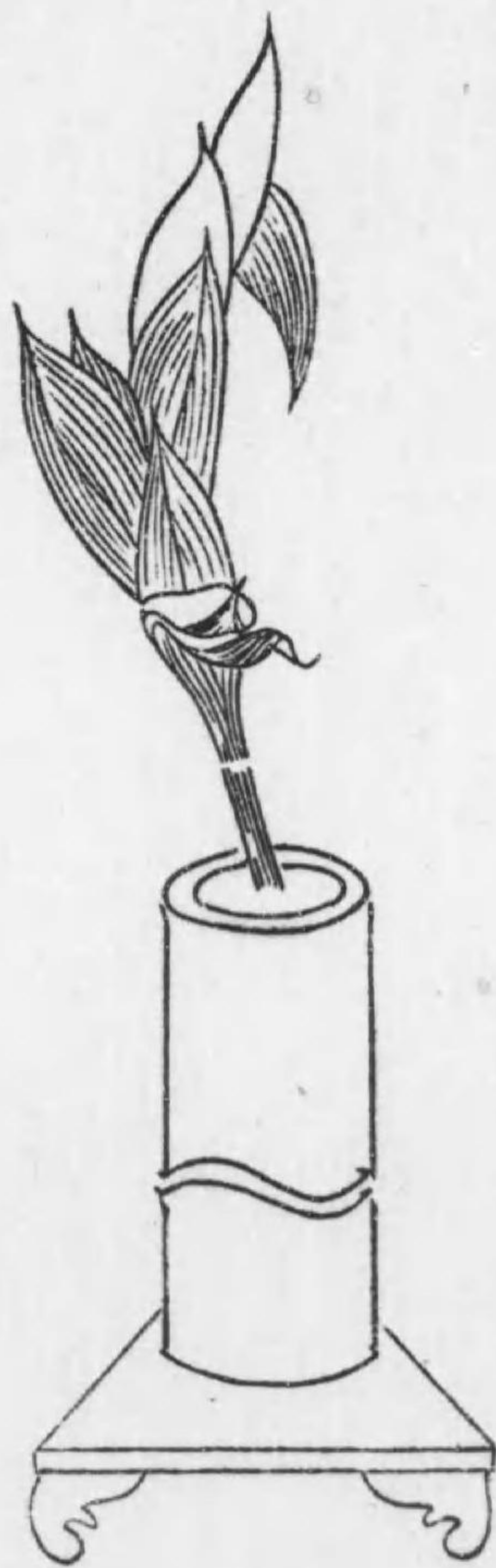
七枚
行之右



六

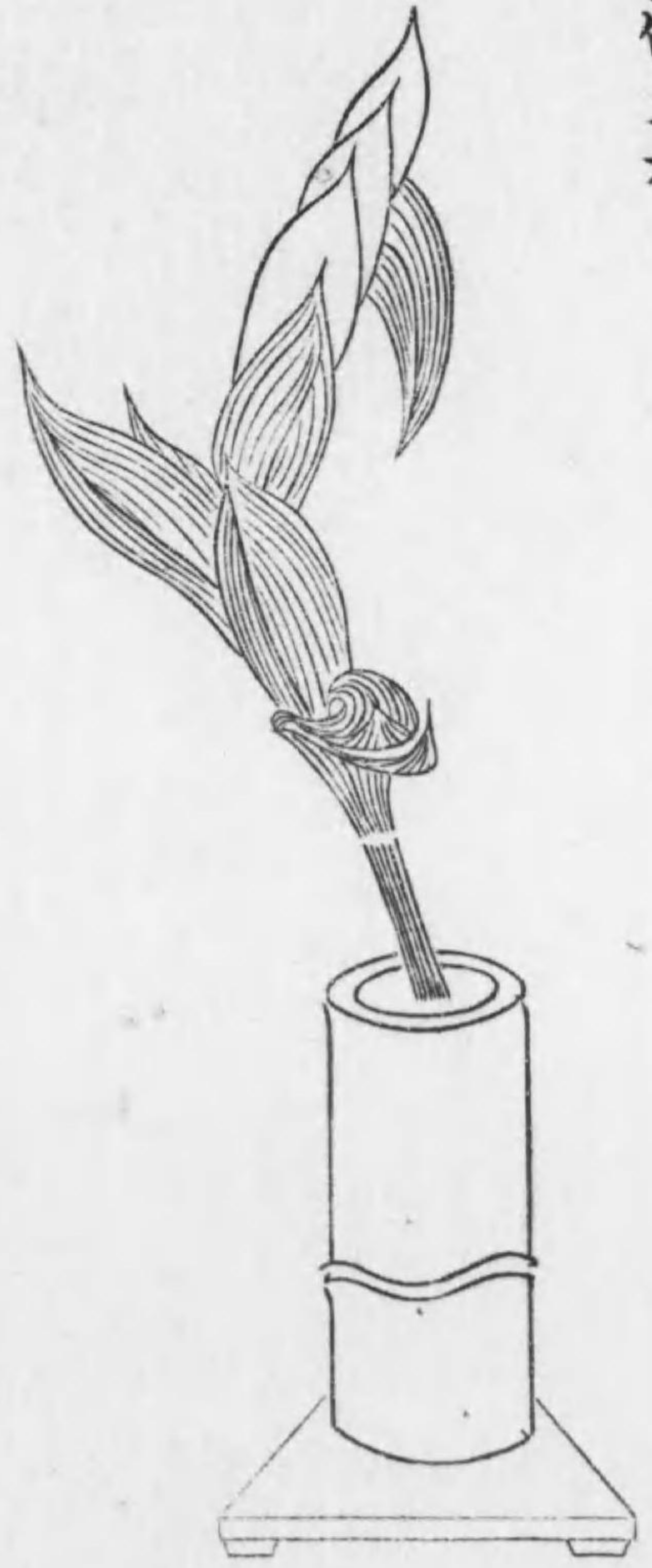
九枚又関節坛

行之右



七

十二枚行之右



八

十三枚行之右



九

真流花



+

聯掛花

二重之掛置

馬蘭之甲之花



十一

靈照女梅



十三

十七枚



十二

縁松之心



十四

若松之心



十五

六
百



花道條目

一 概昔古に儀ハ馬蘭試とて何れも練禁すし
但し行花り熟するれば後其意れ相以て
へし方試守りて其取試好む海うん
才一是元の礼事とさる試皆勢とて古
にも其女礼事とて末流の相論ししと
惟し其練試はこれより入是元の

然り初りて果先此方に付お成好とす
唯作傳授沙守るへし

一秘者古中、勿論會席之節飲食亦におこる
應ふべし

一他流次謝滂傳止此事

一自備較他、諸道此家おこる所深く
信むへし

一花道入社之上、品行正し久し

皇太子、御稱号お成けさるよ、お
信む應ふ事

一會席、順、一足先進たる應し

一傳花、正席とす應し

一花道、上、熱、一、後方の者、今、不、隨、ふ
應ふ事

一花送定期會ハ春秋兩度と定む春ハ
三月廿一日を以テ 聖德太子會執行
す秋ハ九月廿一日を以テ死亡者社員ニ
對シ追弔會相受むものなり

一會席其他公會乃席に相傳外の花
生(志)亦(志)送(送)禁(禁)ん

一孫才、會席に花以列するも會席札の事

一會席亦此節略股班禮具股僭上を法
むへる事

一同社中別して睦しむる我執只論有
間敷事

一花送相傳之義ハ家本ハ定式に守り
御殿乃御名譽哉好けざるよしを
公の事

右之條々陰々相奇り當門下に入
社此上陰陽此心理以杯磨しく
脩身齊家此助に奇り此ふてん掛
主れ也

花勢

林麻坊

黙仙

慶應三

丁卯夏

右の要圖及花道條目は先師林蘇
坊の遺書に——多家中の所許を衆
り明治二十八年乙未秋上梓して門
下に頒り入社し面々陰々可奇相奇との也

長門国小月

花道職 藤永榮三郎

大和国奈良町

幹事 西園周平

全西御門

幹事 中村堯園

河内国交野郡那門村

惣会頭職 过谷清右衛門

長門国清末

花目附 中林榎之浦

明治三十五年八月十日印刷
明治卅五年八月廿一日發行
大正三年九月十日再版
全年全月十五日發行

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

山口縣豊浦郡小月村第四百十六番屋敷

發行人 藤永榮三郎

山口縣厚狹郡吉田村第貳千四百五拾七番地

印刷人 田中政次

山口縣厚狹郡吉田村第貳千四百五拾七番地

印刷所 田中活版印刷所



終

